

[テーマ企画：特集 所有・存在表現]
まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

『語学研究所論集』では、これまでの「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイス」に続き、今回は「所有・存在表現」という統一テーマを組んで、各言語における所有・存在表現の状況を報告していただくということになった。

まず、日本語による38の例文もしくは句からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、本稿稿末のアンケート本体を参照されたい。

こうして15の言語に関する所有・存在表現のデータが集まった。これは外大にある27専攻語のうちの11言語にナーナイ語、マダガスカル語、フィンランド語を加えたものとなっている。

これらの言語を語族別に見ると、まずスペイン語、ドイツ語、ロシア語、ペルシア語、ウルドゥー語はインド・ヨーロッパ語族の言語である。ナーナイ語はツングース諸語、モンゴル語はモンゴル諸語に属するが、これらは(系統ではなく)構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。なおモンゴル語のデータとしたものは、外モンゴルのハルハ方言と、内モンゴルのホルチン方言、さらにブリヤート語からなっている。フィンランド語はウラル語族、アラビア語はアフロ・アジア語族の言語である。朝鮮語の系統は不明とされている。マレーシア語、インドネシア語、マダガスカル語はオーストロネシア語族、中国語は(異論もあるが)シナ・チベット語族、とされている。ただ、複数の語族のデータからなるものの、アフリカやオーストラリア、ニューギニア、カフカース、新大陸の諸言語のデータを欠いているため、本稿での以下に展開される類型論的考察はきわめて不十分なものであることは否めない。

本稿は次のような構成になっている。

1. 企画に至った経緯
2. 先行研究
3. アンケート結果の検討と分析(その1): 所有・存在文
 - 3.0. 分析の枠組み
 - 3.1. 述語
 - 3.1.1. 「持つ」型言語
 - 3.1.2. 「ある」型言語
 - 3.1.3. 所有接辞(proprieteve)型言語
 - 3.2. 所有者～場所(possessor ~ location)
 - 3.3. 被所有者～存在物(possessum/possessee ~ located object)

- 3.4. その他
- 4. アンケート結果の検討と分析 (その2) : 所有構造
- 5. 今後の課題
- 付録 : アンケート

2. 先行研究

Lyons (1968) では、情報構造の違いによって存在/所有に異なる構文が現れることを諸言語の例により示している。以下の英語の例は Lyons (1968) の例文に筆者の判断で主題 (topic) と評言 (comment) の境界を || によって加えたものである。|| が文頭にある場合は、文全体が評言である。

- a. I || have a book. / || I have a book.
- b. The book || is mine.
- p. On the table || there is a book. / || There is a book on the table.
- q. The book || is on the table.

Heine (1997) は、叙述所有 predicative possession と限定所有 attributive possession ('Peter's car') を分け、叙述所有をさらに have 構文 ('Peter has a car') と belong 構文 ('The car is Peter's.') に分けている。

また、所有のより具体的な起源として、次の8つのスキーマをあげ、叙述所有表現をそれらからの文文化の結果ととらえている (X は所有者, Y は被所有物) : ①X takes Y (Action), ②Y is located at X (Location), ③X is with Y (Companion), ④X's Y exists (Genitive), ⑤Y exists for/to X, ⑥Y exists from X (Source), ⑦As for X, Y exists, ⑧Y is X's property (Equation). 他方、所有の概念 (所有構造の意味内容) としては次のものを上げている : ①物理的所有, ②一時的所有, ③永続的所有, ④分離不可能所有, ⑤抽象的所有 (病気や感覚, 心理状態など), ⑥無生物分離不可能所有 (全体と部分) ⑦無生物分離可能所有。

Stassen (2009) は、所有述語の形態統語的諸形式を次の4つに分類する : ①**Locational**: The possessor nominal usually shows locative marking, and the possessive sentence looks identical in surface form to an existential sentence, ②**With**: The possessee nominal occurs in a phrase with comitative marking, e.g. a *with* adposition, ③**Topic**: The possessor and possessee nominal show no marking; the clause contains an existential verb, presumed intransitive. The possessor assumed to be the topic and the possessee the subject, ④**Have**: The possessor and the possessee nominals show no marking; the clause contains a transitive verb typically descended from an Action verb of taking, seizing, grabbing etc.. ただしここで Stassen (2009) は中国語の有 *yǒu* を自動詞とみて③に属するものとしている。

Lander (2009) は連体的な所有構造について、所有者が話題的 (topical) な場合が典型的であるとし、すなわちそれは、所有者が「具体的で、有生で、定であって、最善なのは代名詞の場合 (concrete, animate, definite, and, in the best case, pronominal)」であるとしている。そしてそうでない場合はしばしば所有構造ではない構造、例えば形容詞などによって表現

されるとしている。そこで Lander (2009) が示している次のグルジア語の例は、典型的なケースではないが属格が用いられている例である：*p'ur-is dana* [bread-GEN knife] 「パン切り用のナイフ」。《所有者が有生であれば属格が使われるが、そうでなければ他の手段による言語》として、シンハラ語、パマ・ニュンガの諸言語、インバブラ・ケチュア語などをあげている。《所有者が定でなければ属格を使わない言語》としてはトルコ語をあげている。逆に《最も独立度の高い名詞のみが属格を使わず、他の名詞は属格を使う言語》もあるとして、バグヴァラル語をあげている。この言語では単数男性の代名詞、複数人間、および若干の地名は被所有者との一致によって所有を表現し、その他が属格によるという。

Lander (2009) は所有構造が取る形式を決定するパラメータを3つ示している：①表示の位置 (locus of marking), ②指標 (index), ③統合／融合の度合い (degree of synthesis), である。①の「表示の位置」は主要部標示か従属部標示かという違いであり、②の「指標」とは名詞クラスなど他のカテゴリーを同時に標示しているか否かという問題である。③の「統合／融合の度合い」は接辞か、接語か、独立語か、といった違いである。

『月刊言語』(vol.32, No.11: 2003 Nov.) には「「もつ」と「ある」の言語学」という特集が組まれていて、日本語における所有表現の歴史を扱った金水 (2003), ラテン語を源とするロマンス諸語の所有動詞の分布を扱った伊藤 (2003), などをはじめとする諸論考が掲載されている。

譲渡可能所有／譲渡不可能所有に関しては, Chappell and McGregor (1995) があり, 身体部位を中心とした世界各地の言語における譲渡可能所有／譲渡不可能所有についての論考がまとめられている。

3. アンケート結果の検討と分析 (その1) : 所有・存在文

3.0. 分析の枠組み

先行研究に見るように, 所有・存在文は, 基本的には次の3つの要素からなっている。日本語を例に示す。

私は	本を	持っている	／	私には	本が	ある
所有者	被所有物	述語	／	場所	存在物	述語

そこで以下では, 「述語」(3.1.), 「所有者～場所」(3.2.), 「被所有者～存在物」(3.3.), の順に考察を加えて行くことにする。この3者で扱いきれなかった問題については「その他」(3.4.) で扱うこととする。

3.1. 述語

今回のデータにおいて, 述語部分には, まず①「持つ」「ある」など, 独立した動詞を用いるものと, ②被所有物から派生した動詞を用いるものと, ③動詞を用いず接置詞と被所有物で表現するもの, ④被所有物に所有接辞を付加して形容詞的に機能する述語を作るもの, の4つが観察された。

①の独立した動詞を使用するものは、大きくは、さらに「持つ」にあたる動詞を多用する言語と、もっぱら「ある」を使用する言語に分けられる。

本特集でデータが得られた 15 言語のうち、「持つ」にあたる動詞を使用する「持つ」型言語は、インドネシア語、スペイン語、ドイツ語、ペルシャ語、中国語、マダガスカル語、である。後で見るように、このうち中国語は所有の形態をより具体的に描写する動詞を多く用いるため、「持つ」の使用はその分少ない。またマダガスカル語は「ある」その他の表現方法を比較的多く用いるためやはり「持つ」の使用は少ない。

これに対し、もっぱら「ある」を使う「ある」型言語は、ウルドゥー語、フィンランド語、ロシア語、アラビア語、モンゴル語、ナーナイ語、朝鮮語、日本語、である。

系統的にみると、同じ印欧語族のインド・イラン語派に属しながら、ペルシャ語は「持つ」型言語であるのに対し、ウルドゥー語が「ある」型言語に分かれている点が注目される。

なお、この他に「する」、「なる」にあたる動詞を部分的に用いる言語がある（「する」はマダガスカル語や日本語、「なる」は朝鮮語に観察される）。「着る」およびその他の動詞については後述する。

②以降は、述語といっても単純な述語動詞によるものではなく、厳密には被所有物に何らかの要素を加えて述語を形成するものである。

まず②の被所有物から派生した動詞を用いるものは、インドネシア語およびマレーシア語に観察される。両言語は基本的には「持つ」型言語であるが、より恒常的な所有にこうした述語が観察される。

次に③の動詞を用いず接置詞と被所有物で表現するものは、アラビア語に観察される。

④被所有物に接辞を付加して述語を作るものは、モンゴル語に多く、ナーナイ語とフィンランド語にも若干観察される。この接辞は「所有接辞」(propriative)と呼ばれる。やはりより恒常的な所有にこうした述語が観察される。

以下では、「持つ」型言語 (3.1.1.) と「ある」型言語 (3.1.2.)、④の所有接辞を使用する言語 (3.1.3.)、に分けて考察してゆく。②③については、「持つ」型言語と「ある」型言語の記述の中で触れる。

3.1.1. 「持つ」型言語

次の表は、「持つ」型言語における「持つ」の使用範囲（網掛け部分）を示したものである。左側の言語ほど「持つ」の使用が多く、上の方の項目ほど「持つ」の使用が多くなるように構成してある。なお(27)「YはXのだ」に関しては別途考察するので、表からは外してある。

「持つ」と「ある」に関しては、表中の各言語の動詞の語頭部分を略号として使用した。cop(ula), adj(ective) とあるものは、コンピュータ (+形容詞) 文、形容詞文などになるものを示す。スペイン語では恒常的コンピュータ ser と一時的コンピュータ estar を分けて示した。その他、

スペイン語の項における l は llevar 「着る」、インドネシア語における b- は「ber-名詞」、clq (<colloquial) は口語での使用、を示す。略号でない語については、各言語の記述を参照されたい。なお、マレーシア語とインドネシア語の状況はあまり変わらないので、以下ではもっぱらインドネシア語のデータによって両言語における状況を代表させることとする。

表 1: 「持つ」型言語における「持つ」の使用

言語名	スペイン	ドイツ	インドネシア	ベルシャ	中国語	マダガスカル
「持つ」	tener	haben	punya, milik	būdan	有 yǒu	manana
「ある」	hay	sein	ada	dāstan	在 zài	mişy
(14) あの人には妻がいる	t/estar	h	p/m/b-/a	d/ast	y	ma
(15) あの人には3人子供がいる	t	h	p/m/b-	d	y	ma
(16) タコには足が8本ある	t	h	p/m/b-/cop	d	y	ma
(19) おまえの所には犬がいるか?	t/hay	h	a/p(clq)	d/飼う	y	ma
私は明日用事があります	t	h	p/ a(clq)	d	y	ma
(1) あの人には青い目をしている	t	h	p/m/b-	d/ast	生じる	ma
(10) あの人には才能がある	t	h	p/m/b-/a(clq)	ast	y	ma
(18) あの人にはお金を持っている	t/ser	h	p/m/ a(clq)	ast	y	ma
(20) おまえは自分のペンを持っているか?	t	h	p/m/ a	d	携帯する	ma/携帯する/使う
(2) あの人 {は/の} 髪が長い	t	h/tragen	p/l/b-	d/ast	蓄える	adj
(3) あの人には髭がある	t	h	p/m/b-/a(clq)	d	蓄える	mi
(4) あの人には(見る) 目がある	t	h	うまい	d	y	adj
あの人には熱がある	t/con	h	cop	d	熱を出す	ma
(12) あの人には青い服を着ている	*l/(t)	h+an	b-/着る (clq)/cop	d/着る	着る	する
(13) あの人にはメガネをかけている	*l/(t)	h+auf	b-/着る	d/かける	かける	する
(32) あなたにお願いがあります	t	h	頼む	d	(y)頼む	mi
(24) その部屋には椅子が3つある	t/hay	h/s mit/stehen	a/見つかる	d/b	y	mi
(5) あの人には22歳だ	t	s	b-	d	cop	cop
(6) あの人には優しい性格だ	(t)/ser	s	b-	ast	adj	ma

(8) あの人は背が190センチもある	t	s	cop	d/ast	y	cop
(21) あの人は(誰か別の人の) ペンを 持っている	t	h	保持	ast(手 に)	携帯す る	ma/携帯 する/使う
(22) あの人は運がいい	t/ser	h	p/m/b-	ast	adj	adj
(9) その石は四角い形をしている	(t)/ser	s	b-/cop	ast	cop	cop
(11) あの人は病気だ	estar	h	cop	ast	y	adj
(17) その飲み物にはアルコールが入っ ている	t/l	含む	b-/含む	ast	含む	mi
(23) ここは石が多い	hay	h/s	a/見つかる/多 い	d/ast	adj	adj
(7) あの人は背が高い	ser	s	cop/b-	ast	adj	adj
(28) 昨日, 学校で火事があった	起きる	起きる/es gibt	起きる	起きる	起きる	ma/mi/燃 える
(25) テーブルの上にスプーンがある	hay	s/liegen	a/見つかる	b	y	mi
(29) この世にお化けなんていない	hay	es gibt	a	存在す る	y	mi
(30) (そこには) 英語を話す人もい るが, 話さない人もいる	hay	es gibt	a	b	y	mi
(31) 私より英語ができる人は(ほかに /もっと) います	hay	話せる	a	b	y	mi
(26) スプーンはテーブルの上にある	estar	s/liegen	a/見つかる	ast	z	cop

表1から読み取れることを以下にまとめておく。

まず諸言語で「持つ」と「ある」の使用を分けている条件は、所有者の有生性ではなく、情報構造が主である。すなわち、被所有物/存在物が不特定で、その存在が新情報である場合(25)には、中国語を除いて「持つ」は使えない。特定の物の存在場所を言う所在文(26)では、もはやどの言語でも「持つ」は使えない。中国語の有 *yǒu* 「持つ」はかなり特異で、実在文や絶対存在文でも用いられる。中国語とスペイン語では、(25)と(26)にみるように、情報構造の違いに応じて動詞も別の動詞を用いなければならない。

着用関連の動詞を使用するかについてみると、これを使用する言語には、スペイン語、ペルシャ語、アラビア語、中国語、朝鮮語がある。ドイツ語の着用動詞は所有動詞からの派生形 (*anhaben* 「着ている」、*aufhaben* 「かけている、かぶっている」) であるため、表では「持つ」として扱った。

「持つ」型言語では、「存在」という状態を表わすのに、目的語をとる他動詞、すなわち普通なら動作/行為を示す動詞を使うことになる。したがって動詞によってはアスペクトの調整・表示が必要になると考えられる。このことが最も顕著に現れているのが中国語で、

長「生じる」、留「たくわえる」、穿「着る」、戴「かぶる」、拿「持つ」などの動詞が状態の持続を示すアスペクト助詞 着 zhe をとっているのが観察される。他方、英語の wear やスペイン語の llevar は他動詞でありながらも状態動詞で、アスペクト表現を必要としない。

インドネシア語の「持つ」mempunyai / memiliki / punya は、所有（権利としてその人物に所属していることとでも言うべきか）を含意するので、他の人の所有物を一時的に所持している場合などには別の動詞を使わなければならないという。

中国語では、現在の所有、特に一時的な携帯に、「有」でなく「拿」を用いるという。これは中国がアスペクトに関心の高いことの一つの表われであるかもしれない。

より譲渡不可能的な名詞の所有において、名詞からの動詞派生を用いる言語がある。これが最も強力なのはインドネシア語である（接頭辞 ber- による）。目、髪、髭、足などの身体部位をはじめ、子供、妻など親族、服やメガネなど着用物、さらに背、運、年齢、（優しい）性格などの抽象物の所有にも現れている。所有者が無生物である場合の形や含有物（アルコール）でも使用される。

ドイツ語にもわずかながら Brillen 「めがね」より派生した表現が観察される（Er ist bebrillt. 「彼はメガネをしている」）。

3.1.2. 「ある」型言語

「ある」型言語とした言語のうち、アラビア語は存在動詞「ある」をほとんど用いないようで、もっぱら名詞文によって表現するようである。ロシア語でも存在動詞 est' の使用が任意であるケースは多い。しかし所有者は場所を示す前置詞等によって表現されるので、これらの言語も「ある」型言語として扱う。ロシア語には imet', obladat' などの「持つ」的な意味を持つ動詞も存在するが、これらはもっぱら文語において、しかも抽象名詞の所有に限って用いられているようだ。

以下の表 2 について、説明しておく。

まず、「ある」の使用（網掛け部分）の多い順に、言語は左から、項目は上から配置した点については、表 1 と同じである。

表 2: 「ある」型言語における「ある」の使用

	ロシア	フィン	ウルドゥー	朝鮮	アラビア	ナーナイ	モンゴル
「ある」	/	on	haiŋ	iss-	/	bi-	baj-
(20)自分のペンを持ってるか	u+est'	on	gen+adv+th	iss-/持つ	with	dat+bi-/prop	baj-/prop
(25)テーブルの上にスプーンがある	on+est'	on	loc+th	iss-	on	dat+bi-	baj-
(19)おまえには犬がいるか?	u+est'	on	gen+場所+th	iss-	at1/養う	dat+bi-/prop	baj-/prop

(16) タコには足が8本ある	u/have	on	gen+h	d.s.iss-	for	N/ <u>prop</u> /dat+(bi-)	<u>prop</u> /baj-
(3) あの人には髭がある	u+est'/we ar	on	gen+h	d.s.iss-	for/ <u>prop</u>	<u>prop</u> /dat+(bi-)	<u>prop</u>
あの人には熱がある	u	on	dat+h	d.s.iss-	at1/at2/a dj	<u>prop</u> /dat+(bi-)	V
(15) あの人3人子供がいる	u/have	on	gen+h	d.s.iss-	for	<u>prop</u> /dat+(bi-)	<u>prop</u>
(24)部屋に椅子が3つある	in+(est')	on	loc+h	d.s.iss-	there/in	dat/ <u>prop</u>	baj-/(<u>prop</u>)
(26)スプーンはテーブルの上にある	V	on	loc+h	iss-	on	dat+bi-	baj-
(31) 私より英語ができる人は (ほかにも/もっと) います	est'	on	h	iss-	there V	bi-	baj-
(32)あなたにお願いがある	u	on	h	iss-	at	V	baj-
私は明日用事があります	u+(est')	on	dat+h	iss-	under	dat+bi-	<u>prop</u>
(10) あの人には才能がある	u/have	on	dat+h	d.s.iss-	at1/at2/a dj	N	<u>prop</u>
(18) あの人はお金を持つてる	u+est'/adj	on	gen+ad v+h	d.s.iss-	adj/(with)	dat+bi-/ <u>prop</u>	<u>prop</u> /adj
(21) 別の人のペンを持つてる	u+est'	on	gen+ad v+h	持つ	with	dat+bi-	V
(30) (そこには) 英語を話す人も いるが, 話さない人もいる	there+est'	some	h	iss-	there V	bi-	baj-
(1) あの人には青い目をしている	u	on	gen+h	d.s.adj	for/ <u>prop</u>	adj/dat	<u>prop</u>
(2) あの人には長い髪がある	u	on	gen+h	d.s.adj/ do	for/ <u>prop</u> / comp	dat/ <u>prop</u> /adj	adj/ <u>prop</u>
(14) あの人には妻がいる	u+est'/adj	cop	gen+h	d.s.iss-	adj	<u>prop</u>	<u>prop</u> /baj-
(28) 昨日, 学校で火事があった	in+est'	on	火つく	出る	起こる	dat+bi-	出る
(29)この世にお化けはいない	V/in+not	on	hootaa	ない	~ない	none	baj-否
(4) あの人には見る目がある	adj	cop	dat+h	d.s.iss-	adj	/	<u>prop</u>
(17) 飲み物にアルコールが入ってる	in+est'/co ntain	on	含む	d.s.入る	含む/N	<u>prop</u>	<u>prop</u> /V
(23) ここは石が多い	N	cop	adj	d.s.adj	there	adj/ <u>prop</u>	adj/baj-/ <u>prop</u>
(6) あの人には優しい性格だ	u	cop	adj	d.s.adj	adj/側	adj	<u>prop</u>
(8) あの人には背が190センチもある	N/u	cop	N	d.s.なる	N	N	N

(9) その石は四角い形をしている	u/have	cop	N	N	adj/comp	<u>prop</u>	<u>prop</u>
(12) あの人は青い服を着ている	<u>prop</u> /on/ 着る	on	着る	着る	着る	V/ <u>prop</u>	<u>prop</u> /V
(13) あの人はメガネをかけている	<u>prop</u> /on/ 着る	on/ 使う	かける	かける	着る	V/ <u>prop</u>	<u>prop</u> /V
(5) あの人は22歳だ	dat	cop	N	N	N	N	<u>prop</u>
(7) あの人は背が高い	adj	cop	adj	d.s.adj	adj/comp	adj	adj
(11) あの人は病気だ	adj/V	cop	N	N	adj	V	<u>prop</u>
(22) あの人は運がいい	dat+V	訪れる /cop	adj	d.s.adj	adj	<u>prop</u>	<u>prop</u>

ロシア語については [u「そば」+ 所有者 gen + (est') + 被所有物] の構造を「ある」型文とみなした。すなわち存在動詞 est' の有無に関わらず u によるものを探った。フィンランド語では場所格（主に接格(adessive)）とともに on がコンピュータではなく存在動詞として使われているものを探った。ウルドゥー語ではやはり hain が存在動詞として使われているものを探った。朝鮮語、ナーナイ語、モンゴル語では、それぞれ存在動詞 iss-, bi-, baj- による文をとった。アラビア語では [前置詞 所有者 被所有物] のような構造の文を探った。その前置詞の種類も分けて示した。

N は名詞文，V は動詞文，adj は形容詞による文である。動詞についてはさらに具体的に英語や日本語で記したものもある。フィンランド語における cop は on がコンピュータで使われているもの，アラビア語における comp は複合語による表現である。

表2から読み取れることを以下にまとめておく。

まず「ある」によって表現されにくい(5), (7), (11), (22)はいずれも主体の状態等を示すもので、もっぱら形容詞文もしくは名詞文で示されることがわかる。「持つ」の表では中位に位置し、「持つ」では表現され得る。被所有物が抽象物なので、「ある」によっては表現されにくいのだと考えられる。

譲渡不可能的な体の部分など、一体感のある所有になって来ると、順位が下がってくるようだ。これらは表2では中位を占めている。

情報構造の変換、すなわち(25)テーブルの上にスプーンがある（存在文）、と(26)スプーンはテーブルの上にある（所在文）の違いが、どのように処理されているかについてみよう。まず、単に語順を転換するのみであるのは、モンゴル語、ナーナイ語である。(26)で「スプーン」に冠詞や指示代名詞を付加すれば、あとは語順を転換するのみでよい、という言語が多い。このような言語には、インドネシア語 itu、ペルシャ語 ān、ウルドゥー語 vō、ドイツ語 die、フィンランド語 se、アラビア語 al、がある（冠詞もしくは指示代名詞を

言語名の次に示した)。朝鮮語および日本語では、主題標示要素(「は」など)の付け替えがあるが、ほぼ同じようなシステムと見てよいだろう。

他方、スペイン語、マダガスカル語、ロシア語、中国語では動詞等も異なった表現となっている。

存在動詞そのものに注目すると、存在動詞「ある」にコピュラと同じものを使う言語と違う言語を使う言語があることがわかる。同じなのはウルドゥー語、フィンランド語で、ペルシア語における *hast* も、通常コピュラとして使用される *būdan* の強調形であるという。他方、別形式なのは朝鮮語、日本語である。ロシア語、モンゴル語、ナーナイ語、インドネシア語ではコピュラを使わない。

スペイン語とドイツ語では、特定の物の所在について言う時にはコピュラと同じものを使うが、存在物や存在が新情報である場合には、別の表現となる。

移動動詞に関しては、その移動の *manner* を重視する言語と *path* を重視する言語などに分ける *Talmy* 以来の類型論があるが、存在に関しても存在の様態に注目する言語があるようだ。今回のデータの中、ドイツ語では *liegen*「横たわっている」、*stehen*「立っている」などの動詞が、ロシア語では *ležat'*「横たわる」のような動詞が使われている点が興味深い。

服やメガネについてはやはり着用動詞を用いる言語が圧倒的であるが、フィンランド語に限っては存在動詞文が用いられている。

「(8) あの人には背が 190 センチもある」に関して朝鮮語で、伸縮可の「量」には「なる」にあたる動詞が使われる、という点も興味深い。

今回データの得られた言語において、譲渡可能／不可能 (*alienability*) に関する明確な区別は、アラビア語とペルシア語、ナーナイ語に観察される。このうちナーナイ語は述語所有 (*predicate possession*) においては特にこの区別が問題にならないようである。アラビア語では、前置詞の使い分けによって譲渡可能／不可能が区別される。身体部位や家族、権利など所有者にとって分離不可能なものについては、前置詞 *li-(for)* が用いられるという。今回のデータでは、髪、髭、(タコの) 足、といった身体部位の他に、子供で前置詞 *li-(for)* が現れている。ペルシア語では、特に二重主語文などにおいて、身体部位など譲渡不可能な名詞が現れる場合に、必ず所有人称接辞を伴わなければならない。

(30)(31)の絶対存在文における「できごとの生起」に「ある」が使えるか否かについて見ると、アラビア語を除く全ての言語での使用が観察された。アラビア語では動詞文が使われている。フィンランド語における(30)は、英語の *some* による表現のようになっており、(31)はドイツ語では動詞文になっている。今回の分類では、中国語のみ「持つ」有 *yǒu* で表現するが、残りの言語は全て「ある」を用いて表現している。ただしドイツ語は非人称の存在文である。

3.1.3. 所有接辞(proprieteve)型言語

このタイプの所有は Stassen (2009) の枠組みでは, With-possessive タイプに分類される。

表 2 に prop として記した所有接辞を多用する言語は, モンゴル語とナーナイ語であるが, モンゴル語での使用が際立っている。表 2 では, 実に 33 項目中の 22 項目で使われている (prop と太字及び下線付きで示してある)。ナーナイ語では 16 項目である。逆に, このように所有接辞の使用が多いために, 両言語では「ある」の使用が少ないとも言える。

その使用は, 恒常的で一体感のある所有, 特に譲渡不可能な体の部分などが典型的であるが, 被所有物が譲渡可能な物や, 抽象的なものでも用いられているし, 所有者が無生物でも問題なく用いられることがわかる。使用が観察されないのは, 典型的な存在文, 実在文, 絶対存在文, 一時的な他人の物の所有, などである。

アルタイ諸言語の所有接辞に関しては, 風間 (1999) があり, 所有接辞に関する通言語的・類型論的考察には江畑 (2012) がある。江畑 (2012) によれば, オーストラリア原住民語, ウラル語族の言語, チベット・ビルマ語族の言語, グルジア語, スライアモン語, エスキモー語などに類似の機能の接辞が観察されるという。

本稿でもわずかながら, フィンランド語 (ウラル語族) の連体修飾の所有表現 *parra-kas mies BEARD-WITH MAN* 「髭のある 男」において所有接辞 *-kas* が 1 例観察された。

ペルシャ語において *with* のような機能を示している前置詞 *bā* は, 目, 髪, 背丈, 才能, 服, 子供, のように, より恒常的で譲渡不可能なもの所有に用いられている。時には *bā-este'dād* 「才能のある」のように一体化・語彙化して形容詞となることもあるという。すなわち, この前置詞は所有接辞に一步近づいたものとなっていると見ることができよう。ペルシャ語にはさらに名詞と *dār* 「～持ちの」による複合語もあるという。

アラビア語の *dū* 「所有者」による句も類似の構造と考えたい。ロシア語では, 前置詞を用いた “*he — in blue cloths*” のような構造もある。

最後に, 「する」という動詞の使用について見ると, まずマダガスカル語では着用等に「する」が使われる。朝鮮語では「長い髪をしている」には *hada* 「する」が使えるが「青い目をしている」には使えない。日本語ではどちらにも使える。総じて「する」は, 所有者によるコントロールが容易な所有物の所有の際に現れるとみてよいのではないだろうか。

3.2. 所有者～場所(possessor ~ location)

「全体一部分」の関係から見れば, ふつう属格が使われるべきなのは「女の髪」, 「男の髭」のような語順においてであり, 「長い髪の女」, 「髭の男」ではその語順が逆転している。これは「の」による修飾要素が形容詞的に限定修飾しているために成立している表現であるということが出来る。この場合, その修飾部の名詞は「髭」のような非普通所有物や, 「長い髪」などさらに修飾を受けて情報量が多くなっているものでなければならない。したがって, このような位置に属格が使われるのは通言語的にみて珍しいことではないかと考えられる。今回のデータの中では, 唯一ウルドゥー語においてこのようなケースで属格

後置詞 *kā/kē/kī* が使えることがわかった。ただし目と髪の間では良いが、髭の間では使用できないという。中国語でも髪では「的」が使われる(长头发 的 女人)。日本語では朝鮮語よりこのタイプの表現が成立しやすい。ただしどちらの言語でも「高い背の人」は言えない。その理由は、「高い人」で十分な表現となっており、側面語としての「背」が必要でないためであると考えられる。

前節ではアラビア語において、譲渡可能／不可能の区別によって前置詞が使い分けられていることを見た。譲渡可能／不可能による区別ではないが、所有者～場所の名詞句の特性によって前置詞が使い分けられる言語がある。まずウルドゥー語では所有者であれば属格、存在場所であれば処格による構文となる。さらに被所有物が熟、用事、才能などの抽象物である場合には、所有者には与格が用いられている(以上表2参照)。

ドイツ語では通時的に、現在、属格の衰退と与格の使用範囲の拡大が進行しているという。バルカン半島の諸言語では属格と与格の融合が顕著にみられることが思い起こされる。これに伴い、二重表示も発達しているという。究極的には、これは *Head marking* の所有構造へと向かう *drift* であると考えられる(*dem Mann sein Stift the man.DAT his pen.NOM*「その男のペン」)。

次に、「場所」を示す語に注目する。日本語では「前、後ろ、横、…」などの語はかなり完全な名詞的性格を有している。すなわち、属格名詞句で修飾され、それ自体が格をとることができる。

この点に注目すると、まずインドネシア語、ウルドゥー語、フィンランド語、ナーナイ語の「場所」を示す語は日本語同様名詞的である。アラビア語の *jiwār* 「側」も名詞的である。

他方、朝鮮語では格をとるものの、ふつうは前の名詞が属格をとらない点で名詞性が劣る。中国語は孤立語で格標示が無い上に、前の名詞は格的 *de* をとらない。モンゴル語では基本的に格をとらないため後置詞とされているが、「前、外、横、…」など一部の語は前の名詞が属格をとるので若干名詞的な性格も示しているといえよう。

アラビア語、ペルシャ語の前置詞は属格名詞やエザーフエを伴う点でやや名詞的である。今回の調査データに現れたドイツ語、ロシア語の前置詞に属格名詞を伴うものは無かった。スペイン語の「横、前」は *de N* を伴う。

名詞のトコロ性に注目すると、日本語同様、トコロ性のない名詞を場所化しなければならぬ言語として、まず中国語が挙げられる(来 桌子 这边! 「机のところに来て!」)。インドネシア語では、*Datanglah pada meja (come-PTCL at desk)* 「机のところに来て!」のように前置詞を必要とするようである。他の言語ではあまり明確なトコロ性に関する制限は見いだされなかった。朝鮮語は日本語との類似点が多く指摘される言語であり、中国語からの影響を強く受けてもいる言語でもあるが、この点では違っているように見える。しかしこれは、現在の与格助詞 (*eykei, kkey*) が歴史的には場所名詞を含む表現から発達してきたためであり、かつてはトコロ性を持っていたものと考えられることができる。

3.3. 被所有者～存在物(possessum/possessee ~ located object)

まず普通所有物（髪など）と非普通所有物（髭など）との対立に注目する。インドネシア語では、非普通所有物に *memakai/pakai* 「使う」を使うことができるという。

「制御可能／不可能」所有という観点からは、スペイン語で次のような対立が観察される。

un hombre {de/con} gafas (a man {of/with} glasses) 「メガネ {の/をかけた} 男」

*un hombre {de/*con} la barba* (a man {of/with} the beard) 「髭 {の/をつけた} 男」

しかし、次のような例もあるので、制御とも言えないかもしれない。

una persona {con/de} buena suerte (a person {with/of} good luck) 「幸運な人」

他方ドイツ語においては、メガネ、髭、運、才能、などに区別なく *mit* (with) を使用することができるようだ。

3.4. その他

側面語（性格(6)、背(7)(8)、形(9)など）の使用／不使用についてみると、ペルシャ語（背）、マダガスカル語（背、性格）、中国語（性格）においてこうした側面語が現れるのが観察できる。これらの言語のこうした文は二重主語文になる。次の文はペルシア語のものである。

u qadd-aš boland ast.

彼 背-PRON.SUF.3SG 高い COP.IND.PRES.3SG

さらにインドネシア語、朝鮮語、日本語では、身体部位(2)(3)なども二重主語構文で表現する。日本語もそうだが、このような文に与格を用いると「あの人に髭がある」となり、付け髭か何か、別個に存在する物体が存在するように解釈されてしまう。これは英語における *I hit him on the shoulder.* に対する *I hit his shoulder.* の関係に似ている。すなわち、所有の形式を使った方が別個の存在物の所有を示すことになり、むしろ統語的に切り離れたほうが譲渡不可能的な所有で使われるというしくみになっている。なおスペイン語の *un hombre {de/*con} la barba* においては、*con* を用いれば付け髭という解釈になるという。

(4)の「見る目がある」のような比喩表現が言えるか否かに注目すると、スペイン語、ペルシャ語、中国語、朝鮮語にそのような表現が観察される。中国語には「有眼光」、朝鮮語では「眼目がある」のような表現となっている。

(20)「おまえはペンを持っているか？」に関して、発話時点で所有しているか否か、に注目する言語も存在する。ウルドゥー語で *rak^htē* 「置く」を用いて所有を表現した場合には、必ずしも今実際にそれを持っていないともよい、という (*kyā tum apnā qalam rak^htē hō?* (疑問詞 君 Pron.NOM. 自分の ペン m.sg.NOM. 置く PRES.2.pl. ある Copula.PRES.sg.) 「おまえはペンを持っているか?」)。マダガスカル語でも現在「携帯している」ことを明示する動詞の表現が別個に存在し、使用されるという。

次に実在文(29)「(この世には) お化けなんていない」をとりあげる。まずフィンランド

語ではコンピュータであり存在動詞でもある *olla* を二重に使った文となっている。すなわち一つの *olla* が存在動詞で、文末の *olla* がコンピュータである。アラビア語やペルシャ語では「存在する」という意の独自の動詞が用いられている。

恒久的存在(24)「その部屋には椅子が3つある」と一時的存在(25)「テーブルの上にスプーンがある」の違いについてみる。スペイン語およびドイツ語では恒常的存在の方には「持つ」や *with* にあたる語による表現が可能であり、一時的存在の方では不可能である。

最後に Heine (1997) のいう *belong* 構文で使われる形についてみる。日本語でなら「私の、太郎の」にあたる形であるが、これらを総称する便利な用語は見当たらないようだ。英語では *mine* は所有代名詞と呼ばれるが、Taro's の方は属格形(別用法の)ということになってしまう。ここでは「物主形」と呼ぶことにする。

項目(27)をみよう。まずウルドゥー語、スペイン語、フィンランド語、日本語では物主形は属格と同形である。中国語は的 *de* によるので、属格そのものではないものの、やはり同じ形式である。スペイン語、ロシア語、ウルドゥー語、フィンランド語では、代名詞の変化は一般名詞と大きく異なるが、基本的に属格やそれに類する形(スペイン語: *de N*)が用いられる。ドイツ語でも *von N* を用いることができるが、英語の *belong* 型の構文、すなわち所有者項を与格で要求する動詞 *gehören* を用いた表現になる方が一般的であるという。

これらに対し、まずモンゴル語での属格形はあくまでも修飾に用いられる形として機能しているようで、接辞 *-x* を用いて名詞化しなければ物主形として機能することができない。ナーナイ語には独自の物主接辞 *-ngi* がある(Taro-*ngi* 「太郎のもの」)。なおナーナイ語は *head marking* の所有構造を持つため、属格は無く、この物主形と属格との間に形の上での関連は無い。

ペルシャ語やインドネシア語では、「財産、所有物」にあたる名詞を属格もしくは並置で修飾することにより物主句を構成する。朝鮮語では「もの、こと」を広く指し単独では用いることのできない依存名詞によって物主句を形成する。

アラビア語では、「このペンは私のペンです」のように、独自の物主形は別個に存在せず、同じ名詞を繰り返すことによってその意味内容を表現する。

興味深いのはマダガスカル語で、対格が物主形として機能するという。

4. アンケート結果の検討と分析(その2):所有構造

以下に見る表3は連体修飾句における属格、もしくは最も *default* な所有形式の使用を示したものである。ウルドゥー語、モンゴル語、アラビア語、フィンランド語、ロシア語、ドイツ語、朝鮮語については属格の使用を網掛けで示した(朝鮮語における問題点は後述)。中国語は的 *de* を属格相当として扱った。ペルシャ語はエザーフエ、スペイン語は前置詞 *de*、インドネシア語は後置修飾、マダガスカル語はリンカー、ナーナイ語は所有人称接辞による主要部標示の所有構造を、それぞれもつとも *default* な所有構造として扱い、網掛

けによって示した。

やはり左側の言語ほどその使用が多く、上の方の項目ほど属格の使用が多くなるように構成してある。/ はその項目のデータが得られていないもの、g は属格、adj(ective) は形容詞、adv(erb) は副詞、comp(ound) は複合語、inf(initive) は不定詞、ins(trumental case) は具格、loc(ative case) は処格、N は名詞、para(taxis) は並置、prep(osition) は前置詞、ptcp(participle) は分詞、suf(fix) は接尾辞、vo, ov は動詞-目的語、目的語-動詞、V は動詞を、それぞれ示している。

さらに、モンゴル語における t は -tai/3 [prop.] (3.1.3. 参照)、アラビア語における cncd (concord) は格の一致、インドネシア語の DF (dependent final) は後置による修飾、HM (head marking) は主要部標示 (-nya による)、フィンランド語の ela(tive) は出格、マダガスカル語の L (linker) はリンカー、obl(ique) は斜格、dem-PN (demonstrative pronoun) は指示代名詞、ナーナイ語の p (possessional suffix) は所有人称接辞による主要部標示の所有構造、朝鮮語の cop(ula) はコピュラを、それぞれ示す。

表 3: 連体修飾における属格の使用

		19	15	15	14	12	12	11	10	10	8	8	8	7
		ヘ° ルシ ヤ	ウル ト° カー	モン コ° ル	スヘ°イ ン	アラ ヒ° ア	インドネ シア	フィ ン	中 国	ロシア	ドイツ	マ タ° ガ°	ナー ナイ	朝 鮮
13	バラの花びら	e	g	g	de	g	prep/DF	g	g	g	(g)/com p	L	p	g/ N
12	～の小説	e	g	g	/	g	DF	g	g	g	g	L	p	g
11	Xさんのお母さん	e	g	g	de	g	prep/H M	g	g	g	g	L	/	g/ N
10	犬の鳴き声	e	g	g	de	g	DF	g	g	g/adj	(g)v	par a	V	V
10	火山の爆発	e	g	g	de	adj	DF	g	g	g	(g)v	L	/	N
10	花の匂い	e	g	g	prep/ de	g	DF	g	N	g	g/comp	par a	p	g/ N
9	彼の泳ぎ	e	g	g	n(wa y)	suf	HM	g	g	g	(g)v	g/L	/	(g)
9	机の横に/机の 前に	e	g	g	de	g	DF	g	N	(prep)ins	prep	L	p	N
9	チューリップ の絵	e	g	g	de	g	DF	ela	g	g/(pre p)ins	prep	par a	(p)/ V	N

9	日本語の先生	e	g	g	de	pre p/g	DF	g	N	g	prep/co mp	par a	/	g/ N
9	井戸の水	e	g	g	de	pre p/g	prep/DF	g	N	adj/pr ep	prep/co mp	(L)	/	g/ N
8	冬の雨	e	g	g	de/pr ep	g/p rep	DF/prep	a	g	ins/ad j	prep	obl	p	N
7	車の運転	e	ov(inf)	N	de	g	DF	g	vo	g	(g)v	par a	V	N
6	あの人の次	e	g	g	de	/	AE	ela	g	(prep)ins	prep	par a	p	N
5	果物のナイフ	e	ad v	g	prep	g	prep	co mp	N	prep	prep/co mp	L	(p)/ V	N
4	東京の家	pre p/(e)	loc	g	de/pr ep	pre p	prep	v	g	prep/ adj	prep	de m- PN	V	N
4	雨の日	e	g	t	de	v.p tcp	DF	a/c om p	N	adj	adj	V,r el.c	/	V
3	紙の飛行機	e	g	N	de	adj /pr ep	prep	co mp	N	adj	prep/co mp	V	suf	N
1	英文の手紙	pre p/(e)	ins	N	prep	v	prep	adj	N	adj	prep	obl	V	N
0	妹の花子	par a	par a	N	para	cnc d	para	N	N	para	para	par a	N	V(co p)
0	社長の田中さん	par a	par a	N	para	cnc d	para	N	N	para	para	par a	/	V(co p)

表から読み取れることを以下にまとめておく。

言語に関してみると、まずペルシャ語のエザーフェの使用範囲がきわめて広く、「同格」を除くほとんど全てに使用可能であることがわかる。アラビア語の属格の使用範囲も広く、ひょっとするとこの地域の地域特徴ではないかとも考えられる。ウルドゥー語の属格、スペイン語の *de* の使用範囲も広いが、裏を返せば、これらの言語は名詞間の関係の意味的

な違いにあまり関心がないと言えるだろう。

これに対しこれらと対照的なのはドイツ語やロシア語で、多様な前置詞によりその意味的な関係の違いを明示しようとしている。前置詞が使用できるか否かに関しては、当然その言語の前置詞の性格が関わっている。まず前置詞が動詞と名詞の関係を示すだけではなく、名詞と名詞をも繋げる性格を持っていることが、所有構造での前置詞の使用の前提条件となる。

ドイツ語では複合語の使用も盛んで、6項目に観察される。中国語も語彙化して一語となったものがいくつも観察される。フィンランド語は出格を用いたり、複合語を用いたりしている点でドイツ語に似ており、ウラル語族の言語ではあるもの、ヨーロッパ的な性格を示しているのではないだろうか。

朝鮮語では、明示的な形式 **-uy** のみを属格と認めたので、属格の使用の最も少ない言語であるという分析結果になっている。しかし実際には **N** と記した名詞の並列、および濃音化が機能していることに注意が必要である(朝鮮語のデータを参照されたい)。朝鮮語は名詞志向構造の日本語に対して動詞志向構造を持つ言語であるとされており、動詞による連体修飾で表現されている項目も少なくない。なお朝鮮語の **-uy** は歴史的にみると処格に由来するものであるという。上記のドイツ語における与格の属格化と同じ方向への変化であることが興味深い。

項目について見ると、「全体部分の関係」や、「動作の主体」などに、典型的な所有構造が現れることがわかる。「場所の基準」、「題材」、「取得源」、「時期」、「動作の対象」などになるとその使用は減って来る。「用途」、「場所」、「材質」などになるとさらに減る。ナーナイ語には、材質を示す独自の接尾辞 **-ma** 「～製の」の存在する点が注目される。

「同格」は日本語以外では属格等を使用することができないようである。その表示はほとんどの言語でもっぱら並置に拠っている。ペルシャ語で、同格が使われる(37)「妹の花子／社長の田中さん」においてエザーフェを用いると、「(複数いる) Xのうちの、姉妹方(の家族、親戚)の X」、「複数の Yのうちの、社長をしている Y」のような意味になるという。

最後に、(38)「となりの家の友達のお父さんの車のタイヤ」にみる属格(もしくは他の default の表現)の連続使用の可否について検討する。まずペルシャ語のエザーフェはここでも全く自由にいくつも用いることができ、日本語の「の」との類似性を示している。フィンランド語、マダガスカル語、アラビア語、ウルドゥー語、モンゴル語、ロシア語の属格もかなり自由に重ねて用いることができる。やや制限の有るのは、スペイン語、ドイツ語、中国語、朝鮮語である。さらに制限がきついと思われるのは、インドネシア語、ナーナイ語である。

5. 今後の課題

(1)～(26)にも、連体修飾の所有構造についての質問を設け、そのデータを得たにもかか

ならず、今回十分に分析しきれなかった。たとえばスペイン語ではこのデータにおいて前置詞 de[of]～con[with] の使い分けが観察される。これを含んだ連体修飾の所有構造全体の考察が今後の課題である。

今回の分析結果から、先行研究に対するどのような新しい知見を示すことができるのか、先行研究との十分なつきあわせによってこれを明らかに示すこともできなかった。この点を今後の最大の課題としたい。

最後になるが、アンケートに協力して下さった諸先生方、コンサルタントとなって下さった方々に深くお礼申しあげたい。本稿に示した考察の多くは引用箇所を示さず、本特集の各言語の記述より引用してきている。その点に関してどうか御容赦願いたい。各言語の状況に関して、詳しくは各言語のアンケート結果を合わせて参照されたい。無論、本稿の誤謬等は全て筆者の責に帰するものである。

語研論集特集へのご協力をお願い

語学研究所所長 高垣敏博

語研論集の特集について、このたび以下のような大枠で「所有・存在表現」に関する原稿作成あるいは言語データ提供をお願いすることになりました。

アンケート項目は風間先生に作成していただき、萬宮先生により貴重なアドバイスもいただいております。

特集の趣旨は、自由な（したがって通常は相互に関連のない）投稿原稿ばかりではなく、「語研論集ならではの」というコンテンツを考えてみようということです。特集の個々の寄稿は論文でも研究ノートでも結構です。また、論文・研究ノートを書く余裕がないという場合には、下のようなアンケートに答える形で言語データ提供にご協力いただければと思います。アンケートについては、回答が重複してもいけませんので特集担当者と調整していただくこととなりますが、共通のテーマに関して、さまざまな言語における状況をまずは並べて見てみることから始めたいと考えています。

特集：所有・存在表現

以下の例文に対応する内容は、その言語ではどのように表現されるか？

[] 内は、その例文を訊く狙い等のコメントです。

〈アンケート項目とその意図や説明〉

・全般に「持つ」にあたる動詞（等）を広く用いる言語と、「ある」にあたる動詞（等）を広く用いる言語に分かれるものと思われます。どちらがどの程度用いられるか、両方用いることのできるケースはあるか、などの点に注目しつつ調べていただけるとありがたいです。また一方で、with のような意の側置詞（前置詞／後置詞）を広く用いる言語や、接辞を広く用いる言語もあると思います。いずれにせよ、所有者／存在場所の有生性が大きな要因となっています。

・もちろん、名詞、特に地名や固有名詞の人名などは、その言語やその言語を取り巻く社会・文化的状況においてもっとも適切と思われるものに自由に変えて調べていただいてもかまいません。

(I) あの人は青い目をしている。／青い目の人・目が青い人

【一体的（譲渡不可能的）な、恒常的な所有(I)】[英語であれば、blue-eyed のような形容詞が作られる。他の言語でも「～持ちの」のような意味の接辞が使われることがある（以

下の項目の多くにも). 「目」は角田 (1991) のいう普通所有物なので, 普通何らかの修飾要素が必要.]

(2) あの女 {は/の} 髪が長い・あの女は長い髪をしている. /長い髪の人・髪の長い女
【一体的な, 恒常的な所有(2)】 [上の(1)に比べると恒常性は下がる.]

(3) あの人には髭がある. /髭の人

【非普通所有物】 [非普通所有物なので, 少なくとも日本語では修飾語が無くともこのような表現が成立する.]

(4) あの人には (見る) 目がある. /見る目のある人

【慣用句的表現】 [「目がある人」では, 普通所有物なので, おかしな表現になる. しかし「(見る) 目がある人」のように慣用句的な意味であれば, 成立する. 「足のある人」も「通常より足の速い人」のような意味でなら成立することがある. このような慣用句的表現があるか, どの程度あるか, が, この項目の狙いである. 例えば朝鮮語には「心がある, 頭がある, 精神がある」のような形式の慣用句があるという.]

(5) あ的人是 22 歳だ. /22 歳の人

【側面語のある表現(1)】 [ここからの(5)~(9)は高橋 (1975) のいう「側面語」(「形」, 「性格」など) もしくはそれに類する語を含んだ表現である. 日本語では, いずれも所有表現にも存在表現にもなっていない. 「~持ちの」のような意味の接辞がある言語では, それによって表現できるものが多いと思われる. 単なる形容詞文でしか表現できないという言語も多いだろう.]

(6) あ的人是 優しい性格だ. /優しい性格の人

【側面語のある表現(2)】

(7) あ的人是 背が高い. /背の高い人

【側面語のある表現(3)】

(8) あ的人是 背が 190 センチもある.

【側面語のある表現(4), 属性数量詞構文】 [以上は有生の所有者による項目である.]

(9) その石は四角い形をしている. /四角い (形の) 石

【側面語のある表現(5)】 [無生物が主語でも, 「持つ」にあたる動詞が使える言語があるだろうか? 「その本は値段が高い. /値段の高い本」のような質問項目でも良い.]

(10) あの人には才能がある。／才能のある人

【属性】[角田 (1991) は, 身体部分>属性>衣類>親族>愛玩動物>作品>その他の所有物, のような所有傾斜を提案している. これを参考にして, 以下には衣類や親族の項目を用意した.]

(11) あの人には病気がだ。／あの人には熱がある。／病気の人の

【一時的属性】

(12) あの人には青い服を着ている。／青い服の男

【衣服等(1)】

(13) あの人にはメガネをかけている。／メガネの男

【衣服等(2)】

(14) あの人には妻がいる。／既婚の人・妻のいる人

【親族の所有(1)】[「妻帯である」のような意の形容詞による言語も多いだろう. 日本語ではこのように親族関係である場合に「ある」も用いられることが言われている(「あの人には妻がある」).]

(15) あの人には3人子供がいる。／3人の子持ちの人・あの人の子供3人の子供／妊娠している女性

【親族の所有(2)】

(16) タコには足が8本ある。

【普遍的な事実】

(17) その飲み物にはアルコールが入っている。／アルコール入りの飲み物

【ともに無生物, 含有物】

(18) あの人にはお金を持っている。／お金持ちの人

【もっとも一般的な所有, やや恒常的】

(19) おまえのところには犬がいるか?／犬のいる人

【所有, やや恒常的, 所有物は有生・家畜】

- (20) おまえはペンを持っているか？／ペンを持っている人
【一時的携帯物・自分のもの】
- (21) あの人は（誰か別の人の）ペンを持っている。
【一時的携帯物・他人のもの】
- (22) あの人は運がいい。／幸運な人
【抽象的・一時的所有物】[形容詞による言語も多いだろう。「私に良い考えがある。」のような文ではどうだろうか？]
- (23) ここは石が多い。／石の多い土地
【恒常的存在＞状態／性質】[もし可能ならさらに、この文より恒常性の落ちる「ここは雨が多い。／雨の多い土地」などではどうだろうか？]
- (24) その部屋には椅子が3つある／3つ椅子のある部屋／3つの椅子
【非恒常的存在と数量】
- (25) テーブルの上にスプーンがある。／スプーンのあるテーブル
【存在・存在が新情報】
- (26) そのスプーンはテーブルの上にある。／テーブルにあるスプーン
【所在・場所が新情報】[中国語では、情報構造によって使用する存在動詞そのものが語彙的に違うものとなる。他の孤立型の言語ではどうか？]
- (27) そのペンは私のだ。・そのペンは太郎のだ。／私のペン・太郎のペン
【所有物、属格のプロトタイプ】[「～の」のように日本語では所有物を形式名詞で示すが、言語によって、特別な接辞を用いたり、物主代名詞と呼ばれる形式があったり、属格と同形の要素によって示したり、するようだ。]
- (28) 昨日、学校で火事があった。／私は明日用事があります。
【できごとの生起】[日本の方言の中にはこのような場合、「火事がイク」のように別の動詞が用いられることもあるという。諸言語でどのような動詞が現れるかに注目したい。]
- (29) （この世には）お化けなんていない。
【実在文】[ある対象が、実在するか否かを問題にする文である。]

(30) (そこには) 英語を話す人もいるが、話さない人もいる。

【絶対存在文(1)】 [英語などでは some が現れる. 全体における部分集合の存在を問題にする文である.]

(31) 私より英語ができる人は (ほかに/もっと) います。

【絶対存在文(2)】

(32) ちょっとあなたにお願いがあります。

【抽象的なことの所有・発話内効力のある文】

*以下は「AのB」のような句の所有構造についての質問項目です。日本語の属格(?) 「の」は、その使用可能な範囲がきわめて広く、名詞と名詞であればたいい繋ぐことができるとも言われています。したがって、逆に言えば他の言語では下記の項目のうちの多くは動詞や形容詞などを用いないと属格などでは表現できない可能性があると思われます。また、(動詞と名詞をつなぐ) 格や側置詞のみを用いて、名詞間の関係を示すことのできる言語もあると思われます(日本語ではあくまでも「の」が必要で「母からの手紙」のようになりますが、英語であれば the letter from my mother でよい)。

したがって、このアンケート項目では、他の言語の属格では可能だが、日本語の「の」では不可能な表現については、情報を集めることができません。もしそのような表現の存在にお気づきでしたら、別途報告していただけると幸いです。

属格で表現されることの多いものから、少ないものまで、通言語的に一定の傾向が見出されれば、それは一つの類型論的なハイラーキーの提示につながります。

(33) 冬の雨【時間】 東京の家【場所】

[地名の方は、「AにあるB」のようにしないと表現できない、という言語も多くあると思われる.]

(34) 彼の泳ぎ/犬の鳴き声/火山の爆発【Bが行為を示す名詞である場合の主体】 車の運転【同じく客体/対象】 ~の小説【Aの生産物であるB】

[多くの言語で属格が使用可能なのではないかと考えられる。しかしこれはBの準動詞形の種類や性質、特に名詞化の度合いに大きく左右されると考えられるので、今後むしろ別の観点から深く掘り下げるべきものかもしれない。【生産物】の場合、by のような側置詞による表現が予想される.]

(35) Xさん(固有名詞)のお母さん【親族】 机の横に/机の前に/*机に(来て!)【場所名詞】 あの人の次【時間的關係】

[以上の(33)はBが相対的な性格を持った名詞の場合である。したがってAによる規定がないと具体的な指示対象が決まらない。よりダイクティックな性格の構造ということができる。親族名称の場合、通常の名詞とは異なった所有構造をとったり、所有の要素が必須であったりする言語が多くある。人称代名詞による所有でその傾向は顕著であるようだ。場所名詞に関してはこれを持たない言語も多いだろう。その場合は単に側置詞による表現となろう。日本語では、名詞のトコロ性による問題から、「*机に来て」は言えないが、他の言語ではこのような言い方はできないだろうか？]

(36) バラの花びら【種別】 果物のナイフ【用途】 紙の飛行機【材料・材質】
チューリップの絵【内容】 花の匂い【産出物】 英文の手紙【表現形式(?)】
日本語の先生【職種】 井戸の水【取得源】 [「～の果物」のような産地でも良い]
雨の日【状況】

[以上の(34)は主にBそれ自体の性質に関わるものである。したがって他の言語では形容詞句や関係詞句、側置詞句になるケースが多いと思われる。]

(37) 妹の花子／社長の田中さん 【同格】

[「AであるB」「A B」のようにしか表現できない言語は多いと思われる。]

(38) とりの家の友達のお父さんの車のタイヤ (が昨日突然パンクしたんだって。) 【属格の連続使用】

[日本語の属格はいくつも用いることができるといわれていますが、朝鮮語ではせいぜい2つまでしか使用できないとされている。諸言語での状況はどうだろうか？]

<参考文献>

- 伊藤太吾 (2003) 「ラテン語所有動詞の末裔」『月刊言語』 vol. 32, No. 11. 東京：大修館書店
- 江畑冬生 (2012) 「ユーラシア北東部諸言語の所有を表す接辞の意味と構文論 —導入と総括—」『北方言語研究』 2号, 1-11. 北海道大学大学院文学研究科
- 風間伸次郎 (1999) 「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」 *Altai Hakpo*. [アルタイ学報] 9号, 93-124.
- 金水敏 (2003) 「所有表現の歴史的変化」『月刊言語』 vol. 32, No. 11. 東京：大修館書店
- 鈴木康之 (1978~1979) 「ノ格の名詞と名詞のくみあわせ(1)~(4)」『教育国語』 55, 56, 58, 59
- 高橋太郎 (1975) 「文中における所属関係の種々相」『国語学』 103: 1-17 国語学会
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』
ひつじ書房

Chappell, Hilary and William McGregor eds. (1995) *The grammar of inalienability*. Berlin; New
York: Mouton de Gruyter.

Heine, Bernd (1997) *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*, Cambridge:
Cambridge University Press.

Lander, Yury A. (2009) Varieties of genitive. *The Oxford Handbook of Case*. A. Malchukov and A.
Spencer eds. New York: Oxford University Press. 581-592.

Lyons, J. (1968) Introduction to theoretical linguistics. New York: Cambridge University Press.

Stassen, Leon (2009) *Predicate Possession*, Oxford: Oxford University Press.